

手術治療および皮膚生検(皮膚組織試験採取) 同意書

・手術や皮膚生検(皮膚組織試験採取)に関する副作用や処置後について
(理解できましたら口にチェックを記入してください)。

□局所麻酔薬による副作用：手術や皮膚生検(皮膚組織試験採取)では、皮膚を切開して取り出す処置を行います。よって麻酔なしで処置をするとかかなりの痛みを伴うため、必ず局所麻酔薬を注射してから実施いたします。局所麻酔薬の大きな副作用として、アナフィラキシーショックや痙攣(けいれん)があげられます。局所麻酔薬によるアナフィラキシーショックは、血圧が下がったり、呼吸困難になることがあり、適切な処置をしても最悪の場合死亡することもゼロではありません。アナフィラキシーショックを起こす可能性は、1000万人に約7人の割合であるという報告もあり、かなり少ない頻度とされています。この頻度は、抗生物質の内服によるアナフィラキシーショックよりも少ないと考えられています。少ないとは言え、日本では死亡する患者さんは数年に1人報告されています。安全性は高いですが、絶対に安全であるとはいえないことをご理解いただきたいと考えています。過去に具合が悪くなったことがある場合は処置を行うことはできません。

□出血の危険性：皮膚を切除するので必ず出血を伴います。処置中に出血をコントロールし、帰宅後には再出血が起こらないように実施しています。皮膚を縫った場合は止血はほとんど問題ないと考えられますが、縫わないで処置をして帰宅した場合は、再出血の危険性が多少あります。その時には、ガーゼで数十分圧迫すれば止まると考えています。処置した当日は出血防止のため圧迫してもらい、入浴も控えていただきます。圧迫して止血ができないような処置は入院ベッドがないところでは実施するべきでないと考えておりますので、事前に考えられるときには然るべき医療機関に予め紹介をして処置をうけていただくことをお勧めしています。またワーファリンやブラザキサなどの抗凝固薬や、バイアスピリンなどの抗血小板薬などの血流を改善するお薬(血液をさらさらにするお薬)を内服している方は、出血の危険性がかなり高くなりますので、状況によっては翠皮フ科・アレルギー科では処置ができないこともあります。電気メスを使用することもありますので、ペースメーカーを使用している方は処置ができません。

□処置後の感染：皮膚に傷をつける以上はゼロにはできません。処置後の抗生物質の内服や処置創の洗浄を実施してもらうことによりできる限り防止していくことができます。処置した当日は出血防止のため圧迫してもらい、入浴も控えていただきます。一般的には次の日に取り外してもらい、水道水で洗浄してその後軟膏を外用していただきます。状況によっては少し変化があるかもしれません。

□傷痕の癢痕：手術や皮膚生検(皮膚組織試験採取)は、皮膚に傷をつけるので、必ず皮膚には傷跡が残ります。皮膚の目立っている部分を切除したいということなのに、傷跡が残るのはとお考えの方もいると思われれます。傷跡の残り方は千差万別です。よく見ないとまったく気づかないものから、ケロイドになって盛り上がりてしまいケロイドが増殖してしまうものまでいろいろあります。処置で縫合した傷は、約1週間から2週間で抜糸致しますが、その後はテープで傷を被っていただくことを推奨しています。それを長期間行うかどうかで、傷跡の治り方は全然違います。抜糸後は、皮膚の中では傷が離開しようとする緊張力を防ぐことができません。それをテープで補うことできちんと丈夫な皮膚になるまで補強をすることができます。それでも傷跡の残り方はいろいろです。傷跡が残ることは手術や皮膚生検(皮膚組織試験採取)を行う際には必ず承知をしていただくことをお願い致します。

上記のことをすべて理解し、同意をしたうえで手術や皮膚生検(皮膚組織試験採取)を受けることを希望します。

年 月 日

氏名

(未成年者の場合は親権者の同意 氏名)